

「空のクジラ」 研究

文学研究部 佐々木ひとみ

目次

| | |
|-------------------|---|
| テキスト | 2 |
| 研究の目的と方法 | 2 |
| テキスト概要 | 2 |
| 分析 | 2 |
| ① 「天国」とは何か | 2 |
| ② 「クジラ」とは何か | 2 |
| ③ 『私』にとっての「地上の生活」 | 3 |
| ④ 『私』は何を考えているか | 3 |
| 考察 | 4 |

テキスト

篠崎綺羅「空のクジラ」

初出:「空のクジラ」1999年10月21日 日本幻想社(文芸詩楽)

初収:「空のクジラ」2005年4月20日 彼方文芸社(彼方文芸文庫)

研究の目的と方法

主人公『私』は地上に対する天国をどのようにとらえているのか。天国と地上の関係、およびクジラと『私』の関係を踏まえた上で分析していきたい。

テキスト概要

主人公『私』はバーでつぶらな瞳の男「クジラ」に出会う。『私』は、男の歌声をきっかけに、自分がかつて天使だったことを思い出し、自分が天使でなくなっただけの話を話した。その夜、『私』は男を自宅に泊め、天国が地上に降ってくる夢を見る。次の日、『私』は彼の残した天国の匂いを吸い込みながら、天国はすでに地上に降ってきているのかもしれないと思う。

分析

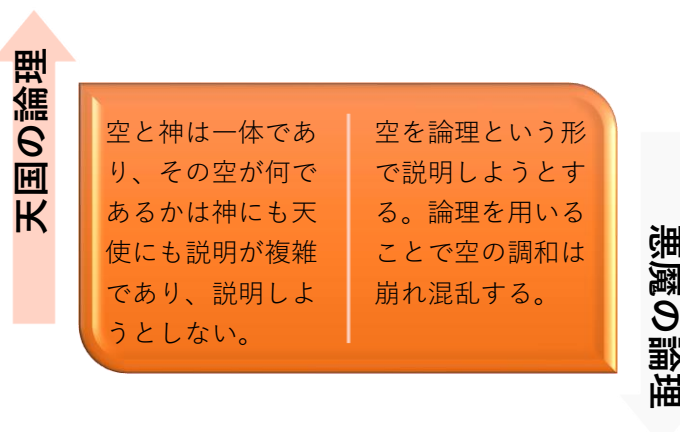
① 「天国」とは何か

天国には「神」「天使」が存在する。神に背いた天使が「墮天使」となる。

神 : 意志や記憶を持つと発狂する存在。真理を語ろうとするものを戒める。空と一体になって生き、空の真理(流れ・音・色・関係など)は不変だと信じる。

天使 : 意志や記憶をもたず、ただ生息する存在。

墮天使 : 意志や記憶をもち、論理を語る存在。悪(空の真理を論理で語ろうとすること)を犯したとして、天国を追放され地上に落ちてきた天使。



② 「クジラ」とは何か

- 繁華街のタクシー乗り場に落ちてきた墮天使。
- 動物のようなつぶらな瞳を持つ。(墮天使は、落ちた場所にいる生物の平均的な姿をとることになる。)

- 『私』にとって、とても懐かしい顔。
- 美声を持ち、『歌』を上手く歌う。

『誰の耳とも親しくないが、そんな歌だった』

『私の関節という関節、血管という血管、内臓という内臓にこだまし、私の記憶のもっとも奥深いところより、数センチ下にもぐり込んだあの頃感覚を呼び起こした』

↓

宙に舞い上がっていく感覚

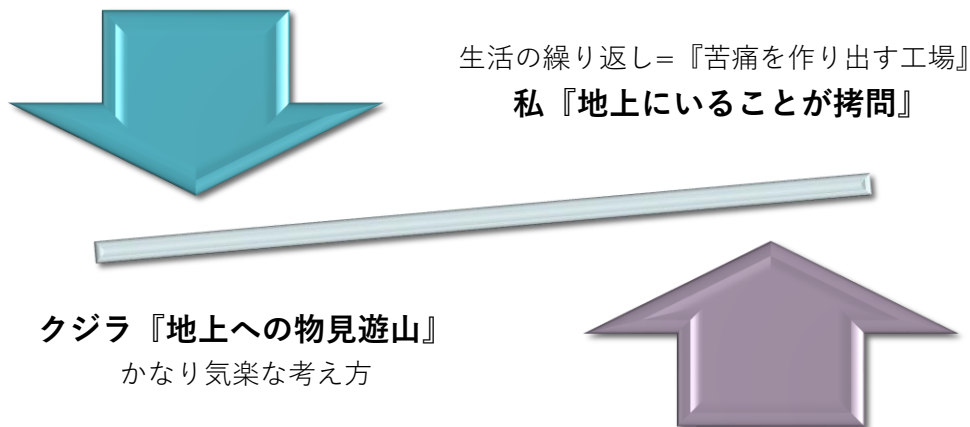
- クジラは天使と人間の中間的存在であり、『地上にはどんな音があるのか確かめたかった』ために地上に自分から落ちてくる。
- 夢をまだ見ることができない。→『まだ意識は天国にある』所為

↓

天国から地上へやってきた異端者なのか。

③ 『私』にとっての「地上の生活」

- 地上生活は天使の悪夢。死ぬほど退屈な繰り返し。
『広大な海の一点に直径 1 センチ穴を掘って住みつく魚のように、地上人は誰しも家を作って住みついている。そして時間が来ると、家から出てゆき、再び迷うことなく戻ってくる』
- この繰り返しは『私』に課せられた拷問。



④ 『私』は何を考えているか

- 『私』は、真理への依存を否定している。
『地上的・地獄的解釈こそ天使や神は耳を傾けるべきなのだ』
『空の真理は不変だと信じる奴のほうが傲慢なのだ』
- 墮天使の仕事として『地上に天国もどきを作ること』を夢見ているが、空の真理を地上の論理で語るだけでは、作ることができないことがわかっている。

↓

論理ではなく共感しあえる場所を作ることが必要。

『天国に対する明確なイメージを多くの地上人が持つようになれば可能なこと』

- 地上人が、「共感」という手段で、空の真理を理解することで、墮天使の楽園(天国とも地上とも異なる新しい世界)が作られる。墮天使の楽園は、天国も地上も否定していくことで作り上げられる。

考察

悪魔に自分の能力を売った『私』にとって、『空の真理』に依存した生き方をする天国は『甘えた』感じのものなのだろう。しかし、『私』は悪魔ではない。天国と悪魔の中間的存在の墮天使という位置にいて、その居場所を失っているのではないだろうか。

天国の繰り返しのない世界と地上の繰り返しに満ちた苦痛の世界を、『私』は対立関係にあるものと捉えており、その天国と地上の同一化を望んでいる。天国と地上が同一化することによって、墮天使である『私』は自分の居場所を作ろうとしているのではないだろうか。そのために天使の真理への完全な依存や悪魔の論理とは異なった『共感』という地上の感覚を用いることで、人間たちの地上とつながりをもとうとした。

またクジラとの出会いによって、『私』は天国と地上の距離を改めて見つめなおすことになる。音という手段で天国と地上のつながりをもつクジラに対して、『私』は夢という形で天国と地上を結びつけて、天使や悪魔のそれとも異なる、地上における墮天使の樂園を作りだしたかったのだろう。